人びとが創るもうひとつのアジア

ハリーナ

HALINA

no.39 2018年2月

【特集】

座談会

3ヵ国若手農民交流を経て見えてきたこと

百姓 オブ ザ ワールド 03
SMALL FARMERS OF THE WORLD.

香港・元朗区（ユンロン） 八郷（バットハン）

鍾 智豪さん（37歳）

チョン・チホ

［写真・文］
安藤丈将／あんどう・たけまさ
武蔵大学教員

鍾智豪の朝は早い。会社勤めの妻ともうすぐ２歳になる子どもの食事を準備するためである。食事が終わると、子どもを電車に乗せ、二駅先にある保育園に連れて行く。その後、彼は、バスに乗って自分の農場に向かい、夕方まで農作業に汗を流し、子どもを迎えに行って、帰宅する。

智豪は、大学卒業後、テレビ局で番組制作をしていたが、フルタイムの仕事を辞め、自分がしたいことを求めて農民になった。今は、菜園村生活館という新界西部にある共同農場で働いている。この農場は、広深港高速鉄道の建設のために立ち退きを強いられた村民の支援者が、2010年に荒れ地を開墾して始めた。ビジネスと観光の都市という香港の一般的なイメージからは想像できないかもしれないが、菜園村生活館は、山をバックにし、そこから水が流れ、鳥の声が響く、自然豊かな環境にある。

香港では、不平等な土地所有などの問題があって、農民が農作物の販売だけで生活していくのは容易ではない。それでも、菜園村生活館には、農を軸に暮らしていきたいと願う人びとが集い、農薬を使わず、自家製の堆肥を使って農作物を作っている。

智豪は、農作業だけでなく、映像制作の仕事を請け負っている。家事や育児全般も担う万能選手である。秋の稲刈りの時、寝入ってしまった子どもを抱きながら、昔ながらの脱穀機を器用に足踏みしている姿には感心させられた。まさに「都市を生きる百姓」である。不安定で息の詰まる世の中にあって、自分の道を生き抜いている智豪から、たくさんのことを教えてもらっている。

菜園村生活館の風景。

RELAY ESSAY ぽこぽこ poco-poco…… 39

“Soging Tundan”

アリッサ・パレデス／Alyssa Paredes
イェール大学社会文化人類学博士課程在学中

イェ・ガスさん（左）と筆者（右）。

昨年、フィリピン・ミンダナオ島レイクセブへ行ったとき、ティボリ族の有名なソングライターであるイェ・ガスに会った。竹で作った高床式の小さな小屋の上で、彼女は床に座り、手織りの服とカラフルなビーズでできた民族衣装を纏っていた。自分はバナナを研究している者だと自己紹介し「Soging Tundan（貴重なるバナナ）」というティボリ族の歌をYouTubeで聞いたことを伝えた。「今まで聞いたことのないバナナの種類の名前が出てくるので感動したのです。歌に出てくるバナナはどこで見つかりますか？　なぜそのバナナを歌に用いたのですか？」と聞いてみた。イェ・ガスは微笑み「その歌は私が17歳の時に作った初めての歌なのよ！　もう私は47歳よ」と言った。

「Soging Tundan」は美しく野心家であったイェ・ガスの青春時代の恋愛模様と落胆をつづった歌だった。フィリピンにある多様なバナナからいくつかのバナナを用いて、恋人たちのふがいなさを打ち明ける。

「〝レモコ〟バナナの幹は高く太い。裕福で彼女にたくさんのものを与えてくれそう。でも、バナナの実が食べられるようになるまでは1年かかる。姿をくらましたり、約束を守れない男たちのよう。

〝セイテン〟バナナはどこか変わっていて魅力的。一つの果房からたくさんの小さなバナナがなって地面に着くまで伸びる。でも、自分がオンリーワンでないことを知って喜ぶ女性がどこにいるかしら。

〝マドゥドゥリカン〟バナナは、3本しか幹が育たないけど、その実は大きく、長くて、甘い。でも、根っこは地中深くまでのびる。自分の気持ちを認められない人のよう。こうした男性は、見た目がいいだけね」と笑いながらイェ・ガスは説明してくれた。

バナナは若い時の彼女の大好きな食べものだった。今、歌に出てくるバナナはレイクセブにある山の上の方にしか生存していない。大規模な土地が商品作物を作るために開墾されてしまったから。若かりし頃のロマンスの遠い記憶のように、希少であまり見られないバナナになってしまった。

私はイェ・ガスに「Soging Tundan」を歌ってくれないかと頼んでみた。彼女の声は美しい竹のチターのようだった。ただ、その歌はお願いした歌とは違うものだった。イェ・ガスが歌い終わり、通訳のメイさんに説明を求めた。「今日のあなたとの出会いについて歌を作ってくれたのよ」と。私は驚き、歌詞の訳を聞いた。

〝なぜあなたは私のところにきたのかしら？

バナナを探しにきただけなら、私たちは出会わなかったはず。何か理由があるはずね。〟 ■

Contents

02 【ぽこぽこ 39】
“Soging Tundan” ◎アリッサ・パレデス

03 【百姓 オブ ザ ワールド 03】
香港・元朗区八郷
鍾 智豪さん
［写真・文］安藤丈将

04 【特集】
【座談会】
3ヵ国若手農民交流を経て見えてきたこと
◎櫻井秋那、寺田 俊、野川未央、箕曲在弘

09 【COLUMN】
［百姓の100章 ⑨］
「農は地球の親友 Dear Earth, From Farmer」
――百姓暮らしは、アグロエコロジー・ワールド！
◎斎藤博嗣＆裕子
［続 Have you ever seen the cinema ⑨］
『盲獣』◎重政栄一郎

10 【Topics】
01-「マウテ・グループ」との戦闘終息と残された課題 ◎石井正子
02-PtoPcafeに関わって思うこと
――学生インターンのご紹介 ◎大久保ふみ

12 【PtoP “最前線”】
オルタートレード（民衆交易）パートナーフォーラム開催
◎幕田恵美子
スタッフが綴る出張ーほれ話
忘れられない出張 ◎山下万里子

14 【Voice from APLA partners】
From Negros, Philippines
KF-RC第7期研修生、卒業後も頑張っています！
From Indonesia
河川の水質調査実施中

15 事務局だより

16 【KITCHEN APLA】
男前ぼうろ ◎按田優子

表紙のことば

1990年代の後半、NGO職員としてタイに2年ほど住んでいたことがある。ろくすっぽ仕事ができるわけでもない私を受け入れ、温かく見守ってくれていた現地のパートナー団体（といっても保健局や感染症管理局といった地元行政組織）の人たちの心の深さと広さには、今でも頭が下がる。

その面々が、ご一行で来日されたのが今から5～6年前のこと。観光で御殿場に行っている彼らの帰りを、今か今かと池袋のホテルで待ったものだ。

写真はこの時に、私にくださったお土産のスカーフ。なんだか地味だなと思いつつ受け取ったのが本音だが、実に使い勝手がいい。黒っぽい服装にも映えるし、決して地味ではない。

タイ人が日本に観光で来るなんて、90年代以前のタイを知っている者としては、隔世の感を抱かずにいられなかった。しかし、彼らのセンスの良さと、人を見る目が変わっていない。私の頭は下がりっぱなしだ。（枝木美香）

特集

【座談会】3カ国若手農民交流を経て見えてきたこと

2016年10月～2017年9月にかけて、APLAでは、フィリピン・ネグロス島、東ティモール、ラオスの若手農民の交流を実施しました。この3地域は民衆交易のパートナー地域で、ネグロスはマスコバド糖とバランゴンバナナの、東ティモールとラオスはコーヒーの産地です。民衆交易を通じて生産者たちの暮らしを支える取り組みと同時に、単一作物栽培への依存から脱却するための作物多様化やそのための技術を学ぶ場づくりとしての交流を実施してきました。2010年に実施したフィリピンと東ティモールの農民交流後、特に東ティモールでは地域の中の活動が具体的に進んでいます。今回はさらにラオスの農民を迎え、また次世代の地域を引っ張っていく若者を対象に交流を実施しました。今号の特集では、交流に参加したスタッフたちに、一年間を振り返って今思うことを聞きました。

座談会参加者

櫻井秋那／APLAボランティアスタッフ
寺田　俊／APLA事務局スタッフ、フィリピン担当
野川未央／APLA事務局スタッフ、東ティモール担当

ファシリテーター

箕曲在弘／APLA理事、3ヵ国交流プロジェクト代表

ラオス交流での集合写真。

フィリピン・東ティモール・ラオス、共通点と違い

箕曲◎まず、交流を実施してみて、3ヵ国それぞれの似ている部分と違う部分について聞きたい。

櫻井◎参加メンバーが農民なので、街とか建物の様子ではなく食べものに目が行っていた。食べられるものかどうかに関心が集まったり、種を持って帰りたいという話が出たり。

寺田◎全員農民だが、置かれている状況は違っていた。例えば、フィリピンのメンバーは農場スタッフ、東ティモールとラオスのメンバーはコーヒー農民。生まれ育った環境によって、知識や経験の違いがあった。

フィリピンに初めて来たラオスの3人にとっては初体験のことばかりで、最初は受け入れられないこともあったようだ。防虫のために石けんを撒くのがなぜダメなのかが分からず、自分たちを否定されたように感じていたが、再会した時に、再びフィリピンと東ティモールのメンバーが懸命に伝えたことで理解するようになった。伝える側も、どうやったら伝わるかを学びながらやっていた。

野川◎各国の共通点は、農村の若者でもみんながスマホを持っていたということ。記録のために使ってもいたが、自撮りや家族・友人とのやりとりなど、スマホに向かう姿が多く見られた。一昔前であれば、その時間もみんなで話をしたかもしれない。東南アジアの農村出身の若者たちでも、スマホの恩恵がある。よいことも悪いことも日本と同じように入ってきている。スマホがなかったらどういう違いがあったかは気になるところ。

箕曲◎スマホの話はしようと思っていた。プログラム最中の集中度はスマホで阻害された部分は多少あったかもしれないが、プログラム終了後に参加者間でFacebookによる交流ができ、終了後にも関係性が持続しているという意味では一長一短。交流は一瞬で熱が冷める可能性があるが、つながり続けることで連帯感が生まれる

かもしれないので、積極的に評価したい。

野川◎これまではプロジェクト実施中に記録するのは主に資金を出している日本側だった。活動報告のための記録写真を撮るために。今回は、参加者たちがスマホなどの自分のツールで撮影している。それをどう活用するかは彼／彼女たち自身によるが、それぞれがFacebookなどを通じて、仲間たちに発信できるというのはものすごく大きな力になる。

箕曲◎記録する側のある種の権力性があるが、SNSがあることによって薄まってきている。

手法としての交流のよさと限界

箕曲◎次に、手法としての交流のよさと限界について話したい。今回のプロジェクトは「支援」ではなく「交流」であった。違う地域の人たちが会ってワークショップに参加し、そこで起こることについてある程度は想定していたものの、最終的な目標は設定しなかった。そのよさと限界について議論したい。

櫻井◎こちら側の意図やこうなってほしいという想いもあるが、結果より過程が重要だと思う。数字で表せるような目標を設定していないので、交流の過程で生まれてくる変化を見られたのがよかった。それが醍醐味。

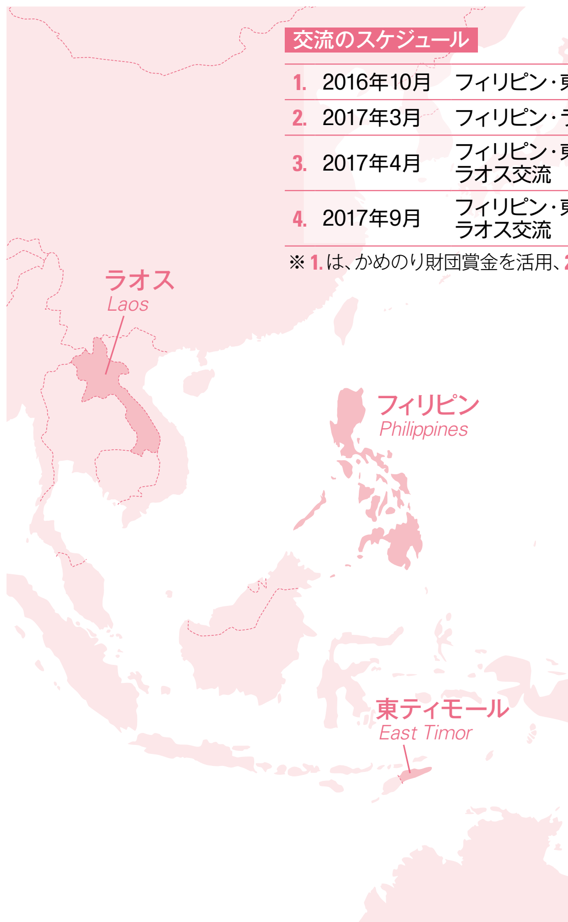
箕曲◎こちらが具体的な目標にこだわりすぎないことによって、意図していなかったことが起こる。過程に注視することで、想定してないことが起こった時に「これおもしろいね」と反応できた点はあった。

寺田◎一般的に農民は懐疑的な傾向があって、頭では分かっていても行動に移さないという人が多い。主催者側が目標設定した座学だと、その場限りで終わってしまう人が多いのではないか。交流することで動きやすくなり、モチベーションが高まって、背中を押しやすい。現地の状況を把握しているファシリテーターが寄り添うことで、予定していないことが起きたときに、その点について詳しい人に話を振ったり、色々な方向へつなげて発展させていける。

箕曲◎確かに、目標設定型の思考方法は農民の思考方法に合わない可能性がある。こちらが無理に目標設定をしてしまうと、窮屈で、間違った方に導いてしまうかもしれない。

寺田◎フィリピンの農村部だと、学校で農業を学んでいるわけではなく、親や仲間と交流し、「うちではこうだったよ」と会話を重ねながら技術を発展させているのではないかと思う。交流の手法は農民にとって負担にならない心地のよい手法ではないか。種の交換なども その例。

野川◎他には、一度きりにしないという継続性が交流の需要なポイント。一年間継続して3ヵ国を訪問してみて思った。ラオスと東ティモールの農民がそれぞれフィリピンに訪問して終えてしまってい



交流のスケジュール

1.	2016年10月	フィリピン・東ティモール交流	@フィリピン
2.	2017年3月	フィリピン・ラオス交流	@フィリピン
3.	2017年4月	フィリピン・東ティモール・ラオス交流	@東ティモール
4.	2017年9月	フィリピン・東ティモール・ラオス交流	@ラオス

※1.は、かめのり財団賞金を活用、2.3.4.は、トヨタ財団助成金を活用。

交流参加者

フィリピン

エムエム／KF-RCスタッフ
ジョネル／KF-RCスタッフ
ミックミック／KF-RC研修卒業生
マイケル／KF-RC研修卒業生
（東ティモール交流のみ参加）

東ティモール

アグス／コーヒー生産者
マルコス／コーヒー生産者
マルセロ／コーヒー生産者
パウラ／APLA現地スタッフ
ルシオ／ATTスタッフ
（ラオス交流のみ参加）

ラオス

シット／コーヒー生産者
タイ／コーヒー生産者
ノイ／コーヒー生産者
ムック／通訳

たら、見えてこなかったこと、生まれてこなかったことがたくさんあった。言語の違いや地理的な距離がありつつも、参加メンバーを固定させて、関係性を作って友だちになり、お互いのことを気遣ったり、意見し合ったりすることができるのだと実感した。人が出会って、関係性を作っていく「交流」の力だと思う。

　具体的な例では、フィリピンメンバーのエムエムやジョネルは、交流の回を重ねるごとに、東ティモールやラオスの仲間たちへの気遣いをより強く見せていった。東ティモールの交流の際に彼らと話した時に、プログラム全体のことや、どうやったらみんながより深い学びができるかに考えを至らせてくれていた。こういうことは、一回ではできなかったはず。交流を重ねて、状況を見ながら、こういう機会があれば仲間たちの将来につながっていくのではないかと考えられるようになるのは、積み重ねの結果。こちら側が一年間の目標を達成するためにプログラムを準備するやり方とは違う。

箕曲◎ 逆に交流の限界は何か。

櫻井◎ プロジェクト終了後は参加メンバーたちに託されるという点。どこまで発展させていけるかは、プロジェクト期間中にどれだけお互いの関係を築き、自分たちから出てくるモチベーションにつなげるかが鍵。私たちがいつまでもフォローできないという限界がある。

寺田◎ 交流中に出てくる疑問や共有するを通じて変わったかのか、体得していくために何をして、やって見てどうだったかを話してほしい。

寺田◎ 実践してみて、結果を自分で知り、いいか悪いかを判断することが多いと思う。この点を踏まえると、最初に東ティモールとラオスからフィリピンを訪問するという順番がよかった。例えば、KF-RCで有機堆肥の作り方を知り、これまでとは違うやり方で実践しているところに、フィリピンのメンバーが訪問してきて確認するという順番。

箕曲◎ ラオスを中心に見るとその流れがよかった。東ティモールはどうか。

野川◎ まだ具体的な形は見えてきていないが、まずKF-RCの循環型農業の実践を見て、その柱に養豚があることを知った東ティモールのメンバーたちの中に「同じ方法ではできなくても、自分たちも養豚をやりたい」という気持ちが高まった。しかし、実際にやりたいと言いながらも実践には至らなかったところに、フィリピンのメンバーが東ティモールに来てくれて、もう一回現場でアドバイスをもらえたことで、動き出した。

　東ティモールにラオスのメンバーが来た時には、コーヒーのダメ出しがされた。その後にラオスを訪問し、自分の目で実際に見て、やっぱり違うと分かってた。「自分たちもやりたい、コミュニティの人たちに伝えていきたい」と話していた。

箕曲◎ コーヒーはその流れでよかったが、他の面ではどうか。もう一度ラオスのメンバーが東ティモールに行ったらよりよいかもしれない。そういう意味では、3カ国を継続して訪問しあったほうがよいかも。

野川◎ 継続してやったらいいのでは、というアドバイスをもらった。

箕曲◎ お金があれば本当にその通り。今回の交流で結構な金額を使っているが、そのほとんどが航空券代。

野川◎ ○○を設置したというような目に見えやすい結果が出るわけではないが、交流でこれだけの成果が出るんだということをいかにうまく伝え、だからそれを支援してくださいということを訴えていかなくてはならない。

箕曲◎ 一般的には数値化できないものは低く見られて評価されない。そういう軸だけで測るべきではないということを、どう訴えられるか。

野川◎ 本当に大きな課題。今回は助成金がとれたから実施できたが……。

箕曲◎ 他に何かよい手法はあったか？

野川◎ やはり毎日エバリュエーションをして、具体的に書き出して話をしてもらったことか。スタッフが一方的に話をしないことを心がけて、参加者みんなに書き出してもらい、それを見返す。

箕曲◎ 書く行為は、一般的に農民にとって日常から離れた行為。そういうことのメリットやデメリット、日常的にやっていないことの意味とは何なのかは気になる。基本的に実践や手を動かすことが彼／彼女らの学びにつながるので、わざわざ言語化しなくても学べるのではないかという穿った見方もできるが。

寺田◎ 記憶に残りやすいのではないか。自分で発表して、イメージとしても残る。

箕曲◎ 言語化したことで、記憶に残ることが、次の国へ行く時に意味を持つのか、あるいはモチベーションにつながるのか。

野川◎ 一概に農民が言語化しないとはいえない。日本では作付の記録を作っている篤農家が多い。一年に一回しかないことを、翌年振り返ることができる。東南アジアでは、文字で記録するのが慣習としてないから、それを導入するのがいいのかは分からないが、振り返ることができるので、ひとつの有効な手法ではある。

1日を振り返るエバリュエーションの風景。

箕曲◎ 篤農家となると、自分の振り返りをして、技術をあげていくことにつながる。そういう意味では、言語化をしたのはよかったかもしれない。

寺田◎ 希望として、今後この交流の参加者たちにはリーダーになってもらいたいので、手法そのものを知るという意味ではいい経験になったのではないか。言語化して頭を整理すること以外に手法も学んだ。

箕曲◎ また、言語化で重要なのは、我々も内容を把握して、次のステップでどういうファシリテートをしていくかに役立てるために、常に情報収集していかなくてはならないということ。

媒介としてのAPLAの役割

箕曲◎ 媒介者としてのAPLAの役割については、これまでの話にもかなり出てきているが、改めて整理したい。ファシリテーターとして日本のAPLAのスタッフが入る意味は何なのか。

櫻井◎ APLAはフィリピンと東ティモールではこれまでの活動を通じて関係性を築いてきていたが、ラオスの農民にとっては、こうしたプロジェクトの話がなければ、他国へ行くこともなかった。ラオスのコーヒー産地の組合メンバーでも、知識は、参加者が現段階で持っている以上のものにはならない。参加者全員が全く新しい知識を得られることはない。

野川◎ 限界というより課題になるが、参加したメンバーたちが暮らす地域にどれだけ影響を与えられるか。どこを訪問しても受け入れコミュニティの対応は「歓迎」になってしまう。おもてなしをしてもらい、深掘りはできずに時間が過ぎてお別れになる。ただその点は、ファシリテートする我々が経験を積んでいけば、改善していける可能性はある。例えば、東ティモールで、ひとつのコミュニティを訪問した際、休憩時間に、フィリピンのメンバーで小学校を中退しているマイケルの話を詳しく聞いてみたら、そのコミュニティにも小学校を中退した中学生

マイケルの話を聞く東ティモールの若者と子どもたち。

くらいの子がいて、他にも似たような境遇の何かしらシンパシーを持つ人たちにも刺激を与えられた。「マイケルは小学校2年までしか学校へ行っていないのに、あれだけの循環型農業で家計を支えている。なぜ自分たちはできないのか」という偶発的な議論が起こった。

多言語の交流と通訳

箕曲◎ 参加メンバーの話す言葉が極めてマイナーな言語であるため、その言語を話せるNGOスタッフの存在がこの交流を成立させていることが重要なポイントとなっている。

野川◎ トヨタ財団の助成で他にも同じような交流プロジェクトがあるが、例えば日中韓であれば、言語の壁があっても、間に入れる人のパイは増えるし、翻訳機能も発達している。先日のトヨタ財団の報告会でも「マイナー言語なのに、本当によくやりましたね」と評価されたが、だからこそ私たちの意味がある。

箕曲◎ グローバル化で人の移動も活発になり、色んな人が出会うことができるが、マイナー言語を話す人たちにとっての壁は依然としてあり、そこに注目しないと、メジャーな言葉にのれずにこぼれ落ちてしまうことがある。

櫻井◎ 常に言葉の面は感じていた。私はラオス語を話せないが、野川さんや寺田さんはメンバーたちの何気ない話や日常的な会話、ニュアンスが分かる。私は通訳を挟むので、さっきのことを話しているなと推測はできるけど、全部は分からない。ラオス語が分かっていたら、もっと彼女たちの本音が知れたかもしれない。言葉がわかって参加することが重要だと思った。

野川◎ 朝から通訳していると夜にはどうしても精度が落ちる。ただ、メンバーたちとの関係性ができているので、逆に参加者が補ってくれた。そういうお互いさまなところが発生してくるのも魅力。

箕曲◎ 一日中ずっと聞いて考えて話すのは専門技能。そこの価値を訴えていく必要性がある。

箕曲◎ 副産物だけど、重要なこと。人が交流するのは、参加者だけでなくファシリテートする側も変わる。

体得のプロセスや言語化という手法について

箕曲◎ 参加者たちがどういうプログラム

若手の女性たちが交流に参加することで、何かしらのインパクトがあった。外からAPLAが入り、きっかけを与えるという意味は改めて見えた。

箕曲◎ よく言われるNGOの役割として「ボトムアップ」や「グラスルーツ」があるが、もう少し掘り下げたい。

寺田◎ 信頼関係、関係性が基本。今回の交流でいうと、自分はフィリピンのメンバーそれぞれの得意分野や知識、彼らの背景を知っているので、その人が持つ引き出しや強みに応じて、彼らに出番を与えることができた。それが草の根で活動しているメリットかな。関係性ができているからこそ、メンバーたちが交流後にボソッと自分にしか言ってこないことがあった。例えば、ミックミックが「自分の組織の話をしようかな。でも緊張しちゃうからな」とか、ジョネルが「自分のところのコーヒーはこうなんだけど」と自分だけに伝えてきた際に、「後でみんなに伝えよう」というように、参加者の声を拾って次につなげることができる。逆に、苦手なことも知っている。ジョネルは知識はあるが、人前で話すのが苦手。最後に発表をする時にはエムエムが話すことになっていたが、ジョネルにやってもらうことにした。他国の参加者にとっては、誰が発表しても変わらないかもしれないが、同じ事をするにしてもより意味のあるものとなるようにファシリテートすることができる。それは関係性があるから。黒子的な役目だと思う。

箕曲◎ こういうことが文字化されて公になることが大事。「出番を与える」という言い方をしていたが、どのタイミングで誰の出番なのか、背中を押したり出過ぎる人を抑えるとか。自信とか尊厳に関わってくる部分。一般の農民は、人前で話すことに自信が持てないこともある。そこをバックアップすることが重要。現地の社会構造の中ではできなくとも、外から介入することによって可能になることがある。ラオスのケースでも同じことが言える。女性が参加して自信を与えられたことは、彼らの慣習だけに従っていたらできなかったこと。

野川◎ ファシリテート（媒介）とメディエート（仲介）の違いも明らかになった。ファシリテーターは何かを促進し目標を達成するために進行を世話するイメージ。メディエーターとなると、単なる橋渡しで、まとめる存在。どちらであるべきかは、状況やレベルによっての判断になるが、今はまだファシリテートの役割が必要な状況だと思う。今後はファシリテーター役がアジアの仲間たちの中から出てくると、私たちはよりメディエートに徹することができる。単なる通訳に。それがステップになっていく。つまり、自分たちの役割が減っていけばよい。オルタナ・トレード・ジャパン（ATJ）の民衆交易についての議論にも出てくるが、私たちの役割が減り、一参加者という存在になるのがいい。でも、まだ私たちにはファシリテートの役割が必要とされている。そういうことが見えてくるのは大きな成果。

ラオスのコーヒー畑で。

交流を終えて、これから

箕曲◎ 今後APLAがどうやってメンバーたちをサポートしていくのか、これまでの一年間でどういう変化があって、参加者はどういう思いをもってどういう方向へ進もうとしているかを教えてほしい。

櫻井◎ ラオスのメンバーたちが共通して言っていたのは、交流での気づきや学びを自分たちで実施してみて、それを周囲に伝えていきたいということ。交流前は彼女たちがどれくらい人前で話したり、プレゼンできるか少し不安だったが、私の想像以上に発信力があり、言葉に力もあって伝えていく想いもある。彼女たちの影響力はまだ小さいが、家族や村の人へ発信していきたいと言っていた。

寺田◎ フィリピンのメンバーたちは、地域の小学校、周りの農民たちにセミナーなどで交流で学んだことを伝えていきたいと言っていた。今回の経験を通じて、伝え方も学んだと。今あるモチベーションの維持やつながりの継続をサポートしていく。何かの情報がほしいという時は、つなげたり、渡したりしたい。彼らが行動に移していけるのを支えていく。

野川◎ 東ティモールのメンバーに関しては、自分たちで自律的に活動運営をしていきたいという思いが強く芽生えたので、そこをサポートしていきたい。今後の課題として、KF-RCのように農民が持続可能な農業を学べて、知識や経験を得られる場所を作りたいと話しているので、それを後押ししていくのがこれからの活動。

寺田◎ 報告用の動画を作っていて思ったが、参加者の表情や発言が交流を経て変わっている。自信が出てきたのが見える。

箕曲◎ 自信がつくというのが、交流のメリット。そういう効果はあると思う。このプロジェクトの成果だと言える。■

ひろつぐとゆうこの
百姓の100章
A Farmer have One Hundred Stories.

斎藤博嗣&裕子／さいとう・ひろつぐ&ゆうこ
一反百姓「じねん道」

第9章 「農は地球の親友 Dear Earth, From Farmer」
――百姓暮らしは、アグロエコロジー・ワールド！

経済や文化、学問など例外なく様々なジャンルで、生き残りをかけて(?)共に働く、協力する、共演、合作、共同作業「コラボレーション」花盛りの世の中。

農業も例に漏れずコラボの連続だ！ そういった流れの講座や講演で「じねん道の一反百姓の実践は、まさに〝アグロエコロジー〟の取り組みですね」と言われることがある。農と環境のコラボ？「agro（農）＋ecology（生態）＝agroecology（農生態学）」の意味は「環境面だけでなく、経済、社会、文化の多様性、生産者と消費者の主体性の向上を目指し、現行の農業システムで破壊されてきたものを取り戻す試み」（日本農業新聞2012年9月3日、京都大学・久野秀二氏）等があり解釈は多様です。

「農業に生態系のしくみを活かす」この概念で思い浮かぶのは、「森は海の恋人」（森からの養分が川を通って海に注ぎ、植物プランクトンを育んで魚や貝などの恵みをもたらす考えに基づき、気仙沼の漁師・畠山重篤さんらによる植林運動）だ。畠山さんに直接お会いした時「この運動を始めた当初、研究とは深く掘り下げることで、広く拡げるものではないと研究者に苦言を呈された」とお話しされた。今でこそ「里山海の連携」活動は認知度が高いが、出発は異端であったそうだ。

組織や序列が重視される縦割り社会、経済的・学術的な固定観念に根差したモノサシではかる価値観の打破。そう「コラボ」とは「システム」の限界に対する現代が求める「反動」なのだ。アカデミックな農学（業）と生態学（論）とが分断された世界観からの脱却。農作物生産だけを重視せず、植物も人間もより大きな生態系の一部とみなし、「自然と共生できる本来の農」を基盤とするアグロエコロジー社会は、失われた地球と地域、生きものと人のコミュニケーションを回復するだろう！

上流から下流まで農が繋がり、生物多様性の守り手として、地球の親友へと立ち還るアグロエコロジー（環境保全型農業）のリアリズムは、自然の声を聴く百姓の現場にこそある。

一反の田畑から、鳥や風によって、その周辺に種が蒔かれ、種が飛び交い、生き物の多様性が増える。農と自然環境が共生する、アグロエコロジー農園が世界中に広まれば、新鮮な空気が満ち、地から水が湧き、砂漠化、地球温暖化の防止につながる。

※一反百姓「じねん道」の自家採種のタネは、APLAのECOで購入できます。

続 Have you ever seen the *Cinema*? あの映画を見たかい？ ―― 09

「盲」と書いて何と読む…？

『盲獣』（1969年、日本）
【原作】江戸川乱歩 【監督】増村保造 【出演】船越英二、緑魔子、千石規子

重政栄一郎／しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー

江戸川乱歩の小説が原作。

先天的盲目のマッサージ師兼彫刻家の男が母親と二人で協力して一人の若い女性を誘拐、自分のアトリエに監禁する。犯行目的は女性を彫刻作品のモデルにするため。

男は女性に言う。「盲でなければできないし、盲でなければ判らない新しい彫刻、触覚の芸術を作りたいんだ。目明きにはできない彫刻ができたら僕は本望なんだ。」女性は男を詰る。「気狂い！」。物語は異様な雰囲気のなか、倒錯した展開を経て、猟奇的な結末を迎える…。

自らの欲望のために身勝手な犯罪を犯す視覚障害者が主役の「感動ポルノ」とは真逆の映画である。

「感動ポルノ」とは（主に）障害者の生い立ちや奮闘を描くことで健常者の感動を誘い、消費する物語のことをいう。それら作品から語られる健常者の感想の典型が、「感動した」「涙した」「元気をもらった」。

優れた作品もあるが、障害者の多くからこうした作品への異議が語られている。曰く「自分たちはあなた方を感動させるためにいるわけではない」。そして、「「気の毒な障害者」を心のどこかで見下している」。

人それぞれ様々な障害に対して、それぞれに必要な相応の配慮や支援は当然だが、彼／彼女らへの特別扱いや過剰対応はそれはそれで差別だ。まして障害者を「無垢な保護すべき弱者」と規定し、その範疇に押し込み、さらにそこからの逸脱を認めない行為や思考があれば、それこそ差別だ。

いかなる障害があろうとなかろうと、またいかなる属性や境遇にあっても、立派な人がいればそうでない人も、賢い人がいればそうでない人もいる。（当たり前か…）

近頃よく使われる「障がい者」という表記にも筆者は、同種の違和感を持つ。その理由は承知しているが、差別でもなんでもないところに差別感情を持ち込み、差別認定をしているように感じられる。そこには思考停止と事なかれ主義の匂いも感じる。

差別語満載で異常な世界が描かれている映画だが、筆者は『盲獣』から「目の不自由な方」への差別意識や意図を毫も感じない。啓蒙が目的の「高尚」な映画でもない。ただの娯楽映画である。

ところで「めあき」って差別語？

『盲獣』
発売元：角川書店
価　格：2800円（税抜）

Topics 01

「マウテ・グループ」との戦闘終息と残された課題

石井正子／いしい・まさこ
立教大学異文化コミュニケーション学部

2017年10月23日、フィリピンのロレンサナ国防相は、ミンダナオ島・マラウィ市で展開された「マウテ・グループ」との戦闘が終息したと宣言した。「マウテ・グループ」とは、オマルとアブドゥッラー・マウテという兄弟が中心であるためそう呼ばれているが、本人たちは「イスラム国（IS）」を名乗っていた。ちょうど5ヵ月前の5月23日、マラウィ市で警戒にあたっていたフィリピン国軍は、フィリピンでISに忠誠を誓う諸グループのリーダーであるイスニロン・ハピロンに遭遇した。「マウテ・グループ」と共にいたハピロンの確保に踏み切ったところ、交戦に発展した。同日、ロシア滞在中のドゥテルテ大統領は戒厳令を布告。以来、激しい戦闘が戦われ、市内の一角は壊滅した。フィリピン政府筋の情報によると、ハピロンと兄弟は殺害され、「テロリスト」919人、国軍・警察関係者165人、一般市民約50人が死亡し、約35万人もの市民が避難を余儀なくされたという（*Philippine Daily Inquirer*, 2017年10月24日）。

マウテ兄弟が抱いていた想い

2017年9月、私はミンダナオ島を訪れ、マウテ兄弟を幼いころから知る人物2名に話を聞いた。二人はモロイスラム解放戦線（MILF）のメンバーである。MILFと比政府は1997年に停戦に合意し、南部に新しい自治政府を設立する和平交渉を行っている。しかし、新自治政府設立は未だに実現していない。兄弟は、南部の問題が一向に解決しないことへの不満を表し、和平交渉という手段では政府に騙されるばかりではないか、と挑戦的な疑問を投げかけていたという。報道が彼らをグローバルなテロリズムに共鳴した過激な人物と描いていたのと異なり、二人の兄弟の人間性をうかがい知ることができた。と同時に、彼らのような若者が台頭するローカルな背景の理解が重要であると改めて思うようになった。

長期化した紛争が生みだしたもの

マウテ兄弟の弟のアブドゥッラーは35歳であると報じられた。1970年代から分離運動を牽引してきたモロ民族解放戦線（MNLF）やMILFの幹部が60歳代以上になる今日、彼らはその子どもの世代にあたる。45年以上もの長きにわたるフィリピン南部の紛争は、若者世代に大きな影響を与えてきた。「ムスリム・ミンダナオ自治地域における若者の暴力的過激主義に対する脆弱性についての調査」（Institute for Autonomy and Governance, 2017）という報告書がある。マギンダナオ州、南ラナオ州、バシラン州、スル州の18～34歳までのムスリム100名を対象にアンケート調査を実施した結果、地域差はあるが、若者が過激グループに参加する一番の動機としては「貧困」があげられた。思想的には過激ではなくとも、貧困により十分な教育も受けず、安定した職にも就けない若者が、携帯電話、iPad、バイク、銃、現金などにつられるのだという。その他、周囲からの勧誘、疎外感、差別、戦闘経験などの個人的な動機から、ムスリムに対する歴史的不正義、政治汚職、弱いガバナンス、不安定な治安、武力紛争の解決遅延など構造的な理由までがあげられた。

報告書は、個人に注目をするだけではなく、若者を取り囲む社会経済的な環境に目を向けることの重要性を示している。「テロ」との闘いは、首謀者の掃討作戦や治安対策だけでは解決しない。麻薬撲滅戦争が薬物使用者や売人を取り締まるだけでは解決しない、と指摘されていることと同様である。しかし12月13日、ドゥテルテ大統領の要請を受け、フィリピン議会はフィリピン南部の戒厳令を2018年末まで延長することを圧倒的多数で承認した。

終息宣言を発表した10月以降、フィリピン政府はマラウィ市の復興・開発に着手した。治安対策だけではなく、社会経済的な構造の変革なしには問題は解決しない。しかし、ドゥテルテ政権下におけるMILFとの和平交渉は遅々として進んでいない。ISのグローバルな展開やマラウィ市での戦闘により、フィリピンのムスリムに対する差別は助長されている。課題は残されたままである。■

マラウィ市内から一時撤退する国軍。（撮影：筆者）

Topics 02

PtoP cafeに関わって思うこと
――学生インターンのご紹介

大久保ふみ／おおくぼ・ふみ
APLA事務局

民衆交易のコーヒーを実際に飲んでおいしさを知ってもらいたい、という思いから生まれたAPLAが運営する小さな移動カフェ車PtoPcafeは、開店から3年が経ちました。毎月1回の出店なので、まだまだ学ぶことは多く、勉強の連続です。だから面白かったりもします。そのPtoPcafeに欠かすことができない存在なのが、学生インターンの小川由羽さんと大島楓さん。ドリンクメニューの開発からお店のディスプレイなど、今のカフェには彼女たちのアイディアがたくさん詰まっています。

今回はその2人にAPLAやPtoP（ほ）について思うことを聞いてみました。

2人のなかのそれぞれの変化

大島「もともとフェアトレードには興味はなく、自分の身体に入れるものや身の回りのものに対してあまり意識したことはありませんでした。でもAPLAに来てからモノが自分の所に来るまでの道筋や、どんな人が関わっているのか、という視点を初めて持ち、それを知れてよかったと思っているので、そういう体験を今までしなかった人とカフェを通して共有できたらいいなと思っています」。

小川「APLAのインターンになろうと思ったのは、世界で不平等な状況があることを知っておかなくてはならないと思ったから。ただ安いものに飛びついて喜んでいてはだめだという気持ちがあって。いざインターンを始めてみたら、商品の説明もできず、自分は何も知らないしできないと痛感しました。APLAの活動を伝える上で気を付けていることでもありますが、まず自分が知らなくては何も言えないと思いました。それから商品をとにかく食べて、知ることから始めました。自分の言葉でないとお客さんには伝わらないなって。ほとんどの商品は食べたんじゃないかな。正直なところ、それまでは勝手なイメージで、オーガニックとかフェアトレードって理想だけ追い求めている感じがあって、コンスタントに買い続けるのは難しいと思っていました。でも、実際に食べてみて全然違うと思い、商品としてだけ見ても確かにこれを選ぶ理由があるなと。最近そうやってよいものばかり食べているから、APLAに毒されています（笑）」。

大島「私は小川さんと違い、何を食べても割とおいしいと思うので、味ではなくて、ちゃんと選んで体に入れることで自分を大事にしていると思えるかで選んでいます。以前はファストファッションを好んで着ていたけど、その背景には児童労働や労働環境に問題があることを聞いたんです。それまではそんなこと全然考えたことがなくて、当たり前のように安いし可愛いからと選んでいました。それが知らないところで誰かの生活を苦しめているのかと想像したら、普段ボランティアとかしているのに……って衝撃でした。

PtoPなモノを食べることで自分のことも大事にできるし、この生活は誰かを傷つけていないぞって思いながら暮らせる意味は大きいなと、私はそこに価値を見出しています」。

小川「フェアトレードってなんか綺麗事っぽくてしっくりきていなかったけど、初めてPtoPって聞いたときにこれだ！と思ったんです。ビジネスとしてだけではなく、産地の人のこともひっくるめて付き合っている形があったんだという衝撃があった。APLAは理想を追い求めるだけではなくて、ちゃんと地に足がついた活動をしているから好きです」。

「きっとここで関わらなかったら仲良くなってなかったよね」と話す大島さんと小川さん。全然タイプの違う2人ですが、ミーティングの時はそれぞれの視点から色んな案を出し合い、なんともいいバランスです。そのおかげか、カフェ営業中の息はぴったり。PtoPの輪の中に入り、いきいきとして、目はキラキラと輝いています。PtoPは、自分で体感して初めてそのよさを感じられるのかもしれません。来月はこれを読んでいるそこのあなたがカフェにいらっしゃるのをお待ちしています！■

来日中、PtoPcafeに遊びに来てくれたカカオキタのデッキーさん（右）と一緒に。大島さん（左）、小川さん（真中）。

（注1）民衆交易は英語に訳すと「People to People Trade」。それを略して「PtoP」と呼んでいます。

※アースデイマーケット@代々木公園ケヤキ並木に毎月出店中！詳しくはこちらをご覧ください。
http://www.earthdaymarket.com/

※東京都内で開催するイベントのお誘いも大歓迎です！　APLA事務局までご連絡ください。

オルタートレード（民衆交易）パートナーフォーラム開催

幕田恵美子／まくた・えみこ
㈱オルター・トレード・ジャパン　広報本部

株式会社オルター・トレード・ジャパン（ＡＴＪ）が設立され、バナナの民衆交易が正式に始まったのは１９８９年10月でした。生協や宅配団体を主な株主として、日本の消費者とアジアの生産者をつなぐ民衆交易が始まりました。

今では、フィリピンからのバランゴンバナナやマスコバド糖に加えて、インドネシアのエコシュリンプ、東ティモールやラオスのコーヒー、インドネシア・パプア州のカカオ、そしてパレスチナのオリーブオイルなど、民衆交易の輪は広がっています。

２０１７年10月20日、各産地で民衆交易品の出荷や生産者支援を担っているパートナー団体の関係者が来日したのを機会に、ＡＴＪとＡＰＬＡのスタッフも入り、「私たちは、何のために民衆交易に取り組んでいるのか？　これから、どんなことを、どのように取り組んでいくのか？」をテーマにフォーラムを開催しました。

各産地での取り組みから「私たちの民衆交易とは」

取組みの歴史が一番長いフィリピン・ネグロス島の事例として、オルタートレード・フィリピン社（ＡＴＰＩ）のヒルダ・カドゥヤさんからは、飢餓救援から始まり、募金や資金協力ではなく、生産者と消費者が協働して経済活動をつくるという新しい発想であった民衆交易の経緯について話がありました。そして現在、地主や多国籍企業による土地買収やバナナなどのプランテーション開発、遺伝子組み換え作物栽培の導入など、人びとの健康や食が脅かされているなかで、「食の運動」として有機栽培の野菜や卵などの宅配事業や、遺伝子組み換え食品についての学習セミナーが始まっているという報告がありました。

インドネシアのオルター・トレード・インドネシア社（ＡＴＩＮＡ）のハリー・ユリさんは、世界的な現象でもある気候変動の問題がエビの生育にも影響を及ぼしている話や、ブラックタイガーの生産が減少し、バナメイという他の種類のエビを生産せざるを得ない状況があるなかで、生産者と共にこの状況をどう乗り越えるのか、行政への働きなども検討していることが話されました。その他、オルター・トレード・ティモール社（ＡＴＴ）のエバンゲリオ・ソアレスさんは、コーヒー産地でも同様に気候変動の影響があることや、コーヒーを通じて生産者の生活を改善することがいかに大事か話されました。パレスチナからは、パレスチナ農業復興委員会（ＰＡＲＣ）のイッサ・エルシャトラさんが、イスラエルによる入植地問題や分離壁建設の状況などを丁寧に解説されました。

６年目を迎えたインドネシア・パプア州の先住民族とのカカオ民衆交易については、カカオ・キタのデッキー・ルマロペンさんが報告。森からカカオを採集して出荷するところから始めたカカオ生産者たちは、地元のバイヤーではなく日本へ直接出荷するようになったことで、品質の問題に取り組むことに。生産者同士で協力しながらカカオの木の手入れをするようになりました。さらに「私たちはカカオを売ってきたのに、チョコレートを食べたことがない」と気づき、日本で製造された「チョコラ　デ　パプア」が届けられたことで初めて自分たちのカカオで作られたチョコレートを食べて喜んだ生産者たち。その後、自分たちでもチョコレートを作ってみたいと、インドネシアの工場でのチョコレートづくり研修に参加。生産者もカカオの発酵やチョコレートづくりの研修を受けました。こうしたプロセスを通じて生産者たち自身が主体となって動き、力をつけ、変わっていく様子が発表されました。

フォーラムを終えて参加者で集合写真。

パートナー団体からの発表を受けて

フィリピンのマスコバド糖は「フェアトレード商品」としてヨーロッパにも輸出されています。民衆交易とフェアトレードの違いをどのように考えているのかと質問が出ました。ヒルダさんは、「フェアトレードは認証制度をもとに商品を販売する一方、民衆交易は関係性をもとに成り立っているという前提はありますが、長年フェアトレードを取り組んでいるドイツの団体は、認証のための手続きの不備があった際にも、『あなたたちと長年付き合っているから信頼している』として商品を受け取ってくれた」というエピソードを紹介し、パートナーとどういう関係性があるかが大事だと話してくれました。

各産地のパートナーの発表では、比較的民衆交易の事業や取り組みの話が中心だったところ、「民衆交易というからには、人びとがよりよい状況になっていかなければならない。組織や事業の拡大だけでなく、社会開発や人びとのエンパワメントの部分が大切である」というデッキーさんのコメントが一石を投じ、各産地、その歴史や文化、取り扱う商品も異なりますが、民衆交易にとって何が大切なのかを考える機会となりました。また、各生産者パートナー団体たちとＡＴＪ／ＡＰＬＡのスタッフが一堂に集まり、話を共有する機会は初めてでした。普段の業務では産地の様子を聞く機会も少ない部署のＡＴＪ／ＡＰＬＡスタッフはもちろん、パートナー団体からの参加者からも、それぞれのパートナー団体の考えていることや産地での取り組みを知ることができたことは有意義だったという感想が多くありました。今後は、具体的なポイントでの討論や課題を掘り下げたいという意見もあり、フォーラムを継続し、民衆交易のパートナーたちと一緒になって民衆交易のことを議論していきたいと考えています。■

▶ネグロス島のバナナ生産者たち。

▼発酵後の豆を乾燥台に広げる。（インドネシア・パプア州）

こんなことがあったんです！
スタッフが語る出張こぼれ話

忘れられない出張

山下万里子／やました・まりこ
㈱オルター・トレード・ジャパン　事業部商品二課

折り鶴が貼られたメッセージカード。

2017年10月、私はパレスチナのオリーブオイルの生産地から来日していたイッサ・エルシャトラさんとグリーンコープおおさか（以下、GCおおさか）の組合員さんとの交流会に通訳として参加しました。今回ばかりはものすごく緊張していました。というのも、イッサさんと会うのはその時が初めて。パレスチナに行ったこともない私が、パレスチナで起こっていることをちゃんと伝えることができるのか……。

実は、イッサという名前は「キリスト」という意味とのこと。会ってすぐにプレゼン資料の分からないところを質問すると、イッサさんは、その名前のごとく、迷える子羊（もとい、おばさん羊）を優しく諭すように、とても丁寧に解説してくれました。

交流会当日、GCおおさかの約50名の組合員の皆さんが集まり、イッサさんに、パレスチナの地で起こっている理不尽な現実について話してもらいました。話を進めていくうちに、参加者の皆さんが、どこか遠い国で起こっていることではなく、自分の身に引き寄せ、怒り悲しんでいる様子が私にも伝わってきました。

無事、プレゼンを終えてほっとしたところで、参加者の皆さんから思いがけないプレゼントがイッサさんに手渡されました。それは、平和の象徴である折り鶴がいくつも貼られ、パレスチナの平和を願うメッセージが書かれた色紙でした。手渡された瞬間、イッサさんが言葉をつまらせました。私も思わず、涙をこぼしてしまいました。そして、参加者の皆さんを見ると同じように涙を流していました。国、宗教、文化を超えて、人と人の心がつながった瞬間に居合わせることができた、忘れられない出張になりました。

Voice from APLA partners

From **Negros, Philippines** フィリピン・ネグロス

KF-RC第7期研修生、卒業後も頑張っています！

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（以下KF-RC）では、2017年2月に第7期生3人が卒業しました。APLAとKF-RCでは、第6期生までは、卒業とほぼ同時に豚舎を建設し、循環型農業が始められるようにサポートしてきましたが、卒業生の住む地域の環境（町までの距離や道路事情、農業インフラの整備）や卒業生それぞれの適性をみると、必ずしも養豚が適しているとも限らないことが分かってきました。そこで第7期生からは、卒業後の様子や農業の実践状況を見たうえで、一人ひとりに合ったサポートをしていくことにしました。カラバオ（水牛）やヤギなどの糞尿を利用した循環型農業が実践可能か様子を見ていきます。

第7期生のご紹介！

ノイノイ

2017年12月上旬に豚舎建設が終わり、多品種の野菜・果物を栽培しています。土壌が痩せているため、豚の飼育を始め、どんどん液肥を撒いて肥やしていきたいと意気込んでいます。

フランク

卒業のサポートとして、2017年10月に妊娠中のカラバオを提供しました。出産後、子牛はKF-RCへ戻し、次期研修生へのサポートとしていく計画です。カラバオにJOYという名前をつけてかわいがっており、自宅近くに穴を掘って糞や有機物を入れて堆肥作りをしていくと話しています。

愛牛JOYと一緒でうれしそうなフランク。

ロドニー

多品種の野菜を栽培しています。週に一度近くの町から仲買人が来るので、生産物の売り先には困っていませんが、農業用水の確保が難しく、雨水のみでの栽培が課題です。2018年2月に豚舎建設予定地近くに井戸を掘る予定。豚舎の設置場所や細かなデザインについて話し合いを重ねています。（寺田俊／APLA事務局）■

From **Indonesia** インドネシア

河川の水質調査実施中

エコシュリンプの産地のひとつであるインドネシアの東ジャワ州シドアルジョ県。その沿岸部では、昔から多くの住民にとって、河川の産物（エビや魚）が重要な経済基盤となってきました。

オルター・トレード・インドネシア社（ATINA）とエコシュリンプ生産者の有志によるNGO「KOIN（インドネシア環境保全）」は、そういった水産物の収穫量に大きな影響を及ぼす地域の河川の水質を自分たちで把握し、改善につなげていきたい、と調査を開始しました。シドアルジョ県内のエコシュリンプの養殖池には、ポロン川、サンゲウ川、バケプ川、ペペ川、ブントゥン川という5つの河川から水が流れ込んでいますが、2017年度は、そのうち2つの河川で継続的な水質調査を実施しています。KOINのメンバーたちは、「水質調査の結果を分析して、地域住民や地元政府に対して具体的な行動提起をしたい」と語っています。

水質の調査のためのサンプリング作業中。

KOINは、環境保全型のエコシュリンプ養殖の意義について、改めて生産者にしっかりと伝えることで、将来の世代にエコシュリンプを引き継いでいきたい、と色々な努力をしてきています。そのひとつとして、月刊のミニ新聞を作成し、生産者に配布するなどしています。また、養殖池のある地域の村々で家庭ごみを回収するプログラムも軌道に乗っており、河川と密接につながっている環境の問題改善に積極的に取り組んでいます。（野川未央／APLA事務局）■

事務局だより

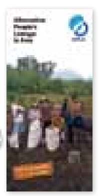
事務局の動き（2017年11月～2018年1月）

11月 4日	東京八王子市・日々器で開催された青空レストランに参加しました。
11月 12日	幸せの経済国際フォーラム2017・2日目に開催された、「ローカリゼーション映画祭」と「分科会・農と食のローカリゼーション」に参加しました。
11月 14日	グリーンコープおかやまで「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 15日	グリーンコープ（島根）でｆｒｏｍネグロスセミナーが開催されました。
11月 23日	東京都日の出町「ひのでマルシェ」に "PtoP" カフェで出店しました。
11月 23日、24日	BMW技術全国交流会に秋山と寺田が参加しました。
11月 24日	パルシステム東京（北A）で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 25日	日本大学三島高等学校で開催されたコーヒー講座に参加しました。
11月 26日	静岡県・三島グローバルフェスタに出店しました。
11月 26日	東京朝市アースデイマーケットに "PtoP" カフェで出店しました。
11月 29日～12月 13日	フィリピン・ネグロスに寺田が出張しました。
11月 30日	パルシステム埼玉（環境委員会）で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 30日	パルワゴン・パルキッチン "フェアトレードランチ＆マルシェ" にATJと参加しました。
12月 3日	国際有機農業映画祭に出店しました。
12月 7日	パルシステム埼玉（蕨）で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
12月 11日	パルシステム東京（鹿骨）で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
12月 15日	「Earth to Bar 南米エクアドル・森を育むカカオのお話～生物多様性からのメッセージ」にゲストスピーカーとして野川が参加しました。
12月 16日	「学びあいが生み出す農家の未来」（プロジェクト成果公表シンポジウム）を東洋大学アジア文化研究所と共催しました。
12月 17日	「小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン 設立発表会＆映画上映＆トーク」に参加しました。
12月 17日	東京朝市アースデイマーケットに "PtoP" カフェで出店しました。
1月 5日～14日	東ティモールに野川が出張しました。
1月 14日	パルシステム埼玉（越谷）で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 17日	筑波大学付属盲学校で「ホンモノの手作りチョコレート」の授業の講師を務めました。
1月 19日、20日	新宿区くらしを守る消費生活展に参加しました。
1月 24日～2月 15日（予定）	フィリピンへ寺田が出張しました。
1月 27日	「再生可能エネルギーが地域を豊かにする～福島の経験から～」をアーユス仏教国際協力ネットワークとJIM-NETと共催しました。
1月 27日	二本松有機農業研究会ソーラーシェアリング・パネルサポーター交流会を開催しました。
1月 28日	東京朝市アースデイマーケットに "PtoP" カフェで出店しました。

事務局からお知らせ

APLAマンスリー募金スタート

APLAでは、新しいサポーター制度を導入し、新たに「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。ぜひ、知人の方へのお誘いお願いします。リーフレットが必要な方には郵送いたしますので、事務局までご連絡ください。



以下の呼びかけに賛同・協力しました。

● 小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン

★『ハリーナ』のバックナンバーがウェブサイトでもご覧いただけます。
最新号発行に合わせて前号を掲載しています。「ハリーナ」を紹介くださる時などにご活用ください。
http://www.apla.jp/archives/publications

編集後記

特集で取り上げた3ヵ国の農民交流、各パートナー地域で頑張っている若者たちの交流が実現したことは、私たちにとっても大きな意味があった。APLAの活動の大きな柱で、特徴づけるものでもある。その後の関係者での振り返りや、報告を兼ねたシンポジウムから、「交流」についての可能性や示唆が見えてきた。「交流」の価値を訴えていくこと、そこで生まれたことをどうつなげるか……。また次なる「交流」に向けて、仲間たちと進んでいきたい。（吉澤）

正月休み、KITCHEN APLAで紹介した男前ぼうろにチャレンジしました。実家のペレットストーブで小豆をコトコト煮て、ゲランドの塩を加え、餡となる塩小豆が完成。その餡を包むそぼろ生地にはもちろんマスコバド糖。味は間違いなし！！
…だったのですが、何がいけなかったのか、レシピのように「おむすびの要領でにぎる」ことがまったくできず、ボロボロに（涙）仕方ないので、タルト型に塩小豆を敷き詰め、その上にそぼろ生地をかぶせて、「男前タルト」にアレンジしたのでした。形は違えど、なかなかに美味しく家族にも好評でしたよ。（野川）

ハリーナ HALINA
2018年2月号 vol.02-no.39
2018年2月1日発行

［編集者］
吉澤真満子
野川未央

［表紙写真］
長倉徳生

［デザイン・制作］
十年舎

［編集・発行］
特定非営利活動法人APLA
（APLA／あぷら：Alternative People's Linkage in Asia）
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
〈tel.〉03-5273-8160
〈fax.〉03-5273-8667
〈e-mail〉info@apla.jp
〈URL〉http://www.apla.jp

［印刷］
株式会社ミック

KITCHEN APLA
キッチンあぷら

Featuring **ゲランドの塩**

料理人が教える「ストーリーのある食材をより楽しむレシピ」
個性的な料理人たちに、民衆交易の食材を使って作ってもらったレシピをお届けします。

レシピ提供・料理
按田優子／あんだ・ゆうこ
東京くらげ〈※〉

男前ぼうろ

使用する素材は6つだけなのに、
これほどまでに滋味深いお菓子ができるとは！
はて、なぜ「男前ぼうろ」というネーミングなの…？
と気になった方は按田さんの著書
『男前ぼうろとシンデレラビスコッティ』をどうぞ。

写真・平河 夏（PHOTO LIEN ∞）

材料（10個分）

【塩小豆】小豆… 1/2カップ　ゲランドの塩（細粒塩）… 約小さじ1
【そぼろ生地】小麦粉… 70g　マスコバド糖または粗製糖… 50g　無塩バター… 45g
トッピング用の黒ごま… 適量

作り方

［1］塩小豆を作る。小豆はよく洗い鍋に入れ、たっぷりの水から茹で、10分くらい沸騰させたら一度お湯を捨てる。再び小豆の5倍くらいの水を入れ、蓋をして弱火で小豆が柔らかくなるまで煮る。

［2］小豆が煮えたら、煮汁ごとざるにあげて水気を切る。その小豆を鍋に戻して塩を加え、しゃもじで混ぜる。10等分にして丸め、バットに並べておく。

［3］そぼろ生地のすべての材料をボウルに入れて手で揉み込むようになじませ、バットに広げて冷凍庫で1時間冷やし固める。

［4］［3］の生地をフードプロセッサーで細かく砕き、［2］の塩小豆を具にしておむすびの要領でにぎる。

［5］天板に並べて黒ごまをトッピングし、180℃のオーブンで15分焼く。

ゲランドの塩はオンラインショップ APLA SHOPにてご購入いただけます。
写真は「ゲランドの塩 細粒塩500g」
http://www.aplashop.jp/shop/

〈※〉東京くらげとは… 日本と世界の保存食、加工食が面白くて仕方ない料理人・按田優子と、そんな按田優子が面白くて仕方ない流しのエディター・しまざきみさこによる、骨なし無色透明な料理ユニット。

ハリーナ HALINA
2018年2月号　vol.02-no.39　2018年2月1日発行　頒価 300円（税込）
［編集・発行］
特定非営利活動法人APLA（APLA／あぷら：Alternative People's Linkage in Asia）
〒169-0072　東京都新宿区大久保2-4-15　サンライズ新宿3F
〈tel.〉03-5273-8160　〈fax.〉03-5273-8667　〈e-mail〉info@apla.jp
〈URL〉**http://www.apla.jp**　APLA　検索

APLAの活動を応援してください。
月々500円からサポーターになってAPLAとつながる！
APLAでは、会員（年会費5,000円）の他、新たにサポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。
問い合わせ・お申し込み
APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。
QRコードからもアクセスできます。
https://apla.secure.force.com/